(社) 日本都市計画学会　都市計画論文集　No. 40−3　2005年10月
Journal of the City Planning Institute of Japan, No. 40-3, October, 2005

161. 灘五郷および伏見における酒造空間の変容に関する研究

A Study on the Changes of the Brewing Space in Nada-Gogou and Fushimi

前谷吉伸*・木下光**・丸茂弘幸**
Yoshinobu Maetani・Hikaru Kinoshita・Hiroyuki Marumo

This study aims to clarify the changes of the brewing space comparatively in Nada-Gogou and Fushimi. The following three things have become clear. (1)At the town block level, through transport method of sake had been changed, in Nada-Gogou the land readjustment was done, and the brewing space itself was renewed. By contrast, in Fushimi the breweries moved as the transport become more convenient. (2)At a building level, by the technical improvement, the breweries have been made multistory and the surplus space has appeared. (3) Additionally, by the brewing company's having decreased the land use has changed. One is to make it sightseeing, and another is conversion to the usages other than it. As it is rebuilt in various buildings, it's important to control the land use as the entire town.

Keywords: Nada-Gogou, Fushimi, brewing space, transport, land use
灘五郷, 伏見, 酒造空間, 輸送, 土地利用

1．序章

（1）研究の背景と目的

兵庫県・灘五郷[1]や京都市・伏見には、現在まで我が国随一の清酒銘醸地として酒蔵が密集し続けている。地域を形成するこれらの酒蔵群は、街区を超えて地域を構成することから、一あるいは複数街区にある1社の酒蔵や施設等の建築群による空間を、本研究では酒造空間と呼ぶ。同様な銘醸地はかつて全国各地に数多く存在し、灘五郷や伏見では変化しながら残っているものの、他では衰退し、場所によっては残っていないところも見られる[2]。つまり灘五郷や伏見では、他を衰退させてしまった様々な変化に対応し、現在でも灘五郷21社、伏見18社が一定の地域内に密集することで、他では見られない酒造地域を維持している。

そこで本研究では、灘五郷および伏見を対象として両地域で比較しながら、以下のことから酒造空間の変容を明らかにしていく。第一に、街区レベルでどのようにして変化してきたのか。第二に、建築単体レベルでは酒蔵がどのように変化してきたのか。また、これらの変化により酒造空間が周辺地域とどのような関係があるのかを考察する。

図-1　酒造空間変容の要因

（2）既往研究と本研究の位置付け

灘五郷に関しては、柚木学が経済学の側面から明治期までの酒造業について詳細な研究[1,2]をしており、輸送手段の変化と立地について指摘している。建築学の分野では多淵敏樹、黒田龍二らが建築史の側面から1981年に木造酒蔵の調査考察[3]を行い、阪神大震災直後の木造酒蔵の変容状況を報告しているが[4]、その後10年が経過しており変化が著しい。一方伏見に関しては、西川幸治らが市街地の歴史的変容実態の研究[5]で、1985年までの酒造業とその土地利用に関して触れている。本研究ではこれらの既往研究を踏まえ、図-1[3]に示すように輸送手段の変化と酒蔵の変容を切り口として2004年現在の酒造空間に着眼し進める。これは、これらの地域の現況を報告し、地域計画や地域形成の側面から新たな知見を加えるものである。

（3）研究の方法と研究対象地域

社史や酒造組合史等の文献調査をもとに研究を行い、酒造会社へのヒアリング調査[4]や酒造用地の土地利用変化の調査[5]で補った。土地利用変化の調査対象地域は、1965年および2004年現在の酒造用地とし、周辺地域とは各酒造組合[6]が灘五郷、伏見と定める範囲とする。

灘五郷は、西宮市から神戸市にかけて東西ほぼ12km の地域であるが、西郷、御影郷、魚崎郷を含む神戸市東灘区及び灘区の酒造地帯（以後灘地区という）と、西宮郷、今津郷を含む西宮市の酒造地帯（以後西宮地区という）に分けられる。また伏見の酒造地帯を伏見地区とする。(図-2,3) [6]

2．輸送手段の変化とその影響

（1）水辺に形成した酒造空間

①灘五郷（灘地区、西宮地区）[7]：江戸中期以降、

*正会員　浅井謙建築研究所株式会社　(Asai Ken Architectural Research Inc.)
**正会員　関西大学　工学部　建築学科　(Kansai University)

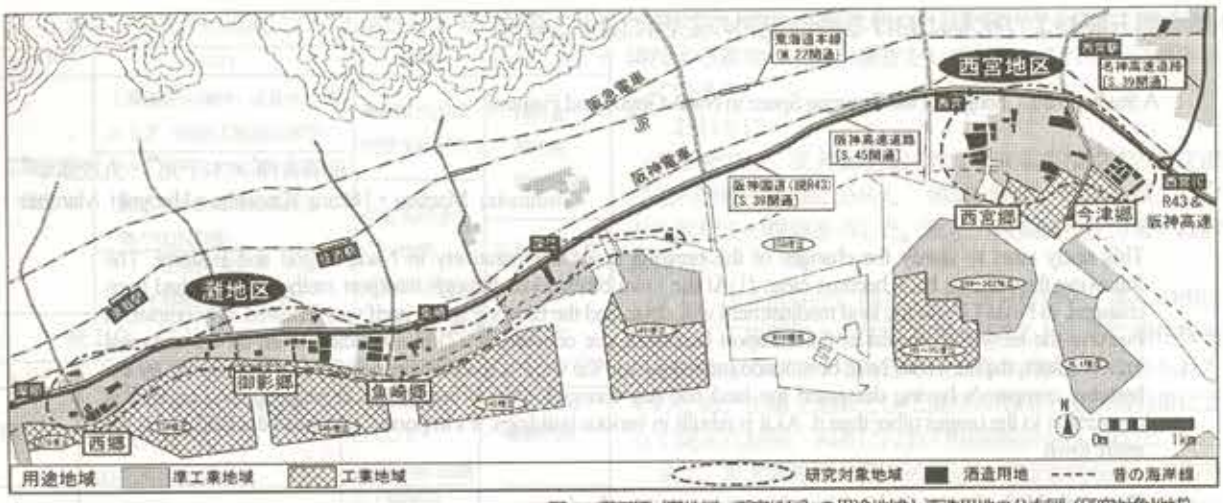

図-2 灘五郷（灘地区、西宮地区）の用途地域と酒造用地の分布図（研究対象地域）

図-3 伏見地区の用途地区と酒造用地の分布図（研究対象地域）

表-1 酒造空間の形成要因

灘五郷		伏見（伏見地区）		
立地的要因（自然条件）	素材的要因	立地的要因		素材的要因
海岸線に形成	宮水（井戸水）	河川・運河沿いに形成		伏水（井戸水）
水運 空間	長距離・大量に近いため、水運により物資が集まりやすい	水	港町、関東での消費地立地	近江の酒米
	六甲山系の恵沢を利用した水車精米の開発と導入	山	京風川の開削による京への輸送の便利さ	宮の良酒水
	西宮村民の技術	空	物資の中継地であり、米などの物資が集やすかった	
	六甲の寒気	間		
	摂海の強気			

図-4 灘五郷、伏見の形成期の酒造空間と水辺空間

図-5 水辺に密接する酒造空間（灘五郷） （左絵図[7]、右写真[8]）

酒造地として新しく台頭した灘五郷は、図-2に示すようにその海岸線に酒造地帯を形成した。図-4に示すようにこの海岸線が面する大阪湾や瀬戸内海は、酒造りに必要な米などの物資が安価に入手しやすい、当時の主要航海路であった。また、西宮郷のある一帯で湧出する有名な宮水[8]を樽詰し、灘五郷全域に運搬するのにもこの水運が利用されていた。一旦西宮港に集められていたそれらの物資を、各酒蔵まで運びやすいように、大阪湾に流れ込む河川の河口の港に密集した。それにより図-2のように現在の五郷を形成した。（表-1[9]） また、図-5左絵図が描かれていることからも分かるように、各酒蔵の前にまで舟寄せができるよう、酒蔵単位としても水辺に開いていた。

②伏見地区[10]：江戸初期、洛外の酒として伏見における酒造業が盛んになったのは、新たに開拓された高瀬川運河[11]と宇治川を伏見港がつなぐことにより伏見が宿場町となり、酒の需要が高まったためである。さらに、京へ酒樽を出荷するのにも高瀬川の水運が使われた。酒米や薪などの物資の搬入についても舟で運びやすいように、図-4に示すように町の内部まで掘られた屈折した濠川運河[12]沿いに、また伏見港に近いところから順に、各酒蔵が立地していった。

このように酒造空間は、船舶輸送を行いやすい水辺空間に密接して形成された。一方、灘五郷は大阪湾に面し消費地である江戸への運搬が容易であったため大きく発展したのに対し、形成が灘五郷よりも早い伏見の発展は、後になってからのことである。（図-1）

（2）輸送手段および交通施設の変化

ここでは、2004年現在実際に酒造を行う灘五郷、伏見の酒造会社のうち、船舶輸送期に創業し、輸送手段の変化以降の立地変化を追うことができる2社の社史を地域的な代表事例として用いる。[13]

船舶輸送は、安価で全国各地へより早く運ぶことができる鉄道[14]という新たな輸送手段に、灘は大正期に、伏見は明治中期に取って代わられ、徐々に衰退していく。次いで、鉄道は昭和初期からトラック輸送に徐々に取って代わられ、

戦後高速道路開通によって、ほぼ全てが移行した。

①灘五郷（灘地区、西宮地区）：灘五郷では、酒造地帯と平行するように明治22年東海道線が全通するが、（図-2）水路の利を活かし大正期まで船舶輸送が並行して用いられていた。[15]例えば西宮地区のA社では、大正2年では約90%が船舶輸送で用いていたが、大正14年には自家用車や大八車等により最寄りの各駅に運ぶ汽車輸送に全て切り替えている。[9]。戦後になってトラック輸送を行う酒造会社が現れ、現在の阪神間に見られる帯状の都市構造を形作る名神高速、阪神国道、阪神高速が図-2のように酒造地帯に平行してより近いところ敷かれ、利便性の高くなったことによりほぼ完全に移行していった。

②伏見地区：舟で全国に出荷するには積み替えが多く、灘よりも不利な伏見では、明治29年奈良鉄道（現J R奈良線）の開通により（図-3）、全国各地の消費地へと出荷できるようになった。このことは、伏見地区のB社では端的に表れている。まだ伏見にまで鉄道が敷かれていない明治25年から京都駅まで運ぶことで東海道線を利用して鉄道輸送を開始し、桃山駅を用いるようになり同33年に50%を突破、同35年にはほぼ全量を輸送している。[10]また現在ある酒造会社のうち鉄道開通以前創業の酒造会社は2社しかなく、逆にその後26社が創業していることからも明らかなように、こうした鉄道輸送の発展ともに、桃山駅が酒造地帯とすぐ近くにできたことで伏見酒造業は大きく発展した。また、図-3のように酒造地帯の西側に国道1号線、それを通ってすぐ北に名神高速が開通したことにより、より利便性の高いトラック輸送への対応となった。

（3）基盤整備および酒造施設の立地変化

図-6[16]はA社B社の立地を時代ごとに表したものである。船舶から鉄道、トラックへという輸送の変化に対応するため、基盤整備および酒造施設の立地に対照的な変化が見られる。

写真-1
分割された酒造用地

①灘五郷（灘地区、西宮地区）：図-6に示すように西宮地区A社では、区画整理により敷地が統合され酒造用地を拡大している。それに伴って敷地が分割された酒造会社もある。（写真-1）図-6に示すように区画整理が灘五郷ほぼ全域で見られる。また、鉄道輸送期までは運搬船で行われていた宮水の輸送は、トラックを用いるようになったため、昭和22年その姿を消し、これと軌を一にして阪神間の海岸線が、図-3に示すように昭和28年以降西から埋め立てられ工業地域へと変貌していった。これらの変化は海側、水辺に対して強い関連性を持っていた酒造業が、輸送手段の変化への対応として鉄道や道路のある山側に向かっていったために起こったものである。つまり、鉄道や道路が酒造地帯と平行に且つ近くに敷かれ、酒造空間を含むその周辺の基盤整備が行われたことにより、酒造空間は場所を変えずに更新が行われた。

②伏見地区：図-3に示すように、鉄道輸送期までは運河沿いに立地していた酒蔵が、徐々に水辺とは離れて立地し始めていき、トラック輸送が主流になると、酒造用地を国道1号線および名神高速道路のICに距離的に近い高瀬川以西に移転させていった。[17]図-6は酒造用地の移転状況を示

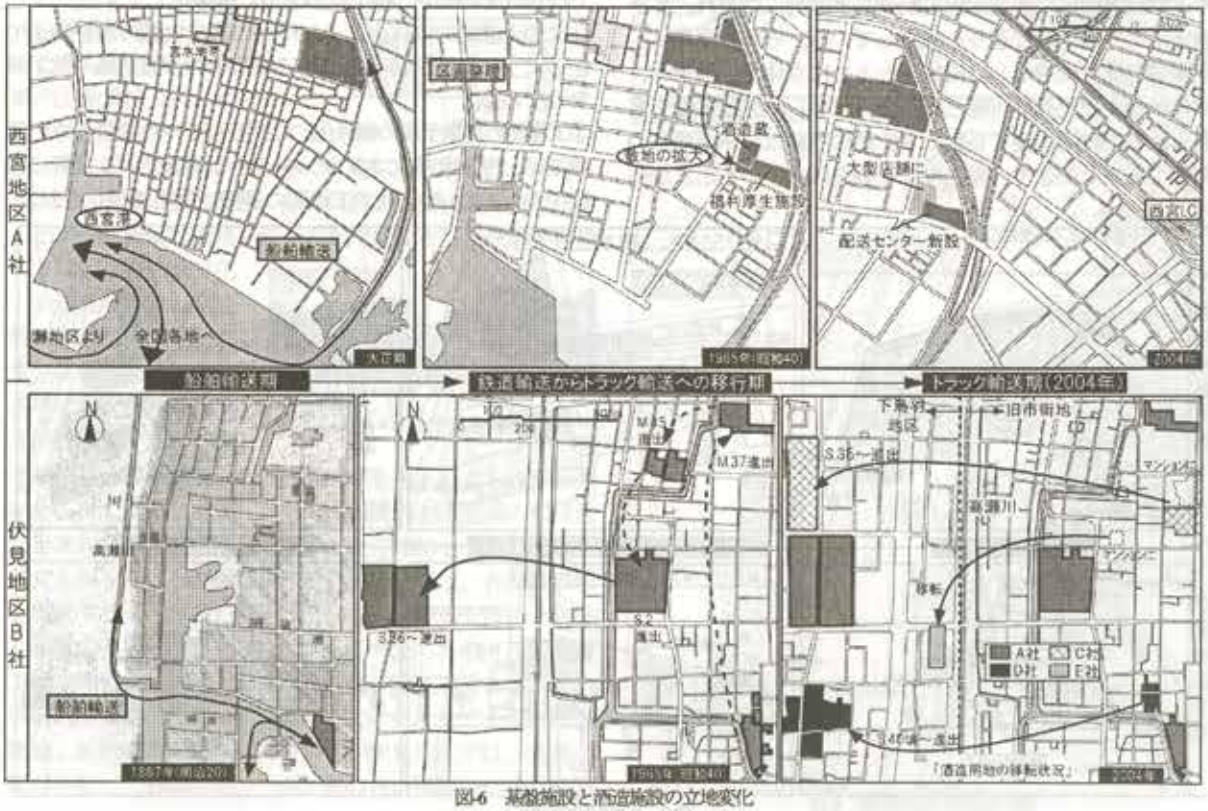

図-6　基盤施設と酒造施設の立地変化

しているが、これまで旧市街地にあった4社が田畑であった下鳥羽地区に移転している。その上伏見が城下町としての性格も残しており、灘五郷のように街路構成を変えてしまうことはなかった。こうして酒造空間が出ていった旧市街地では酒蔵と密接な関係にあった水辺空間が修景されていく。写真-2[8]に示すように、左の明治中期の写真では水辺に対して船着き場として開いているが、右の写真では護岸が整備されている。物流の拠点であった伏見港も、トラック輸送により昭和 37 年淀川の舟運がなくなり埋め立てられ、公園になっている。つまり伏見では、輸送手段が変化し、その交通施設が酒造地域から離れた位置にできたため、灘五郷とは反対に、水辺空間をそれ程変化させることなく、交通施設に近い場所に酒造空間を移転させた。

写真-2　修景された水辺空間

3．酒蔵建築の変容とその要因

（1）酒蔵の変容

船舶輸送期に見られる伝統的な木造酒蔵は、時代と共に以下のように変容している。[18]図-7[19]は前述の灘五郷、伏見の酒造会社2社を事例として、その平面配置の変化を時代ごとに表したものである。

①立体化する RC 造の酒蔵：鉄道輸送からトラック輸送への移行期以前に建設された酒蔵では、木造酒蔵に加え昭和初期から RC 造化された蔵がある。この頃の RC 造酒蔵は、木造酒蔵と同様に酒造工程の配列が平面的に行われ、冬季醸造により風土的な造りを継承している。その後酒蔵は、生産量の拡大に対応し、機械化とともに立体化が望まれ、立体的な工程配列が可能となった。しかし、西宮 A 社でも見られるこの頃に建てられた RC 造の酒蔵は、木造酒蔵の特徴である北側窓や、屋上部に干場を設けていることからも分かるように、完全に機械化されていくための設備機器は整ってはいない。

②設備機器を包む酒蔵：1970 年頃以降 S 造の酒蔵も見られるようになり、屋外タンクに表される設備機器が強化されていく。この頃から屋外タンクを併設する酒蔵のうち、ほとんどが 1970 年頃までに建てられた立体蔵で、後に屋外タンクを設置している。例えば西宮 A 社でも南西の RC 造の酒蔵の周辺に屋外タンクがあるのが分かる。それまで酒蔵は醸造、貯酒の温度管理をいかに行うかによって成立していたが、現在では冷暖房設備が整い、ほとんどの蔵が北側窓を設けていない。つまり、新しい酒蔵を建設するのではなく、生産施設として設備機器の更新を行っている。

③和風意匠化する酒蔵；現況の酒蔵は設備化し、他の工場と差異がなくなってきたため、白壁、杉板をイメージさせるように用途を問わず酒蔵を和風意匠化している。（写真-3）

写真-3　和風意匠の酒蔵

（2）酒造技術の変革

このように酒蔵が変容してきたのは、以下のような酒造技術の変革が行われたことによるものである。

①四季醸造の成立：1950 年頃からの高度成長期かけて需要の高まりと共に、蔵人の不足、老齢化が目立ち、年間を通じた四季醸造の気運が起こった。伝統的な木造酒蔵に見られた冬季に寒気を取り込むといった温度管理ではなく、設備機器による人工的な温度管理が必要となった。

②工程の機械化：戦前までは全ての酒造工程はほぼ手作業で行われていたが、各工程が急速に機械化してきた。[20] これに加え酒蔵の立体化により一つの蔵で大量の酒を醸造できるようになり、図-7 のように醸造を行う酒造蔵の数が減少している。

③工程間の運搬手段の機械化：人が担いでいた原料や水の運搬では、1970 年頃にエアシューターが考案され、工程の機械化から約 10 年を経て工程間の運搬手段も機械化された。

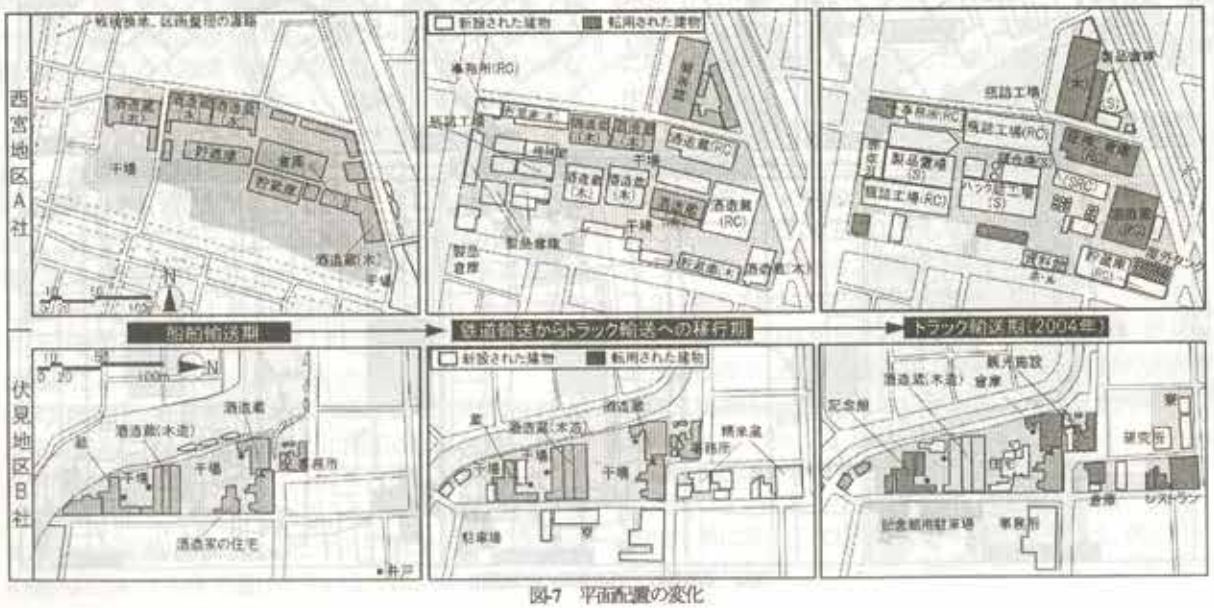

図-7　平面配置の変化

④酒具の変化：現在木製の酒具はほとんど見られず、鋼鉄製のものが使われている。
⑤屋外工程の成立：醸造と貯酒の工程は主に室内で行われているが、設備機器の発展により屋外タンクで醸造を行うことが可能になった。つまり、建築を用いずに設備だけで行う醸造が可能になっている。

（3）面積効率の高まりによって生じた余剰空間

酒造技術の変革により、図-8に示すように面積効率が高められ、余剰空間が生じている。人と空間を膨大に必要としていた各作業は省力化、省スペース化され、これによって、例えば以前必要であった膨大な放冷場が、現在は余剰空間となっている。工程の一部が別の場所で行われるなど、圧送パイプ用いることによって、位置関係の自由度を高めている。図-7に示すように、木製の酒具を洗浄し乾かすための蔵前である干場が消失している。

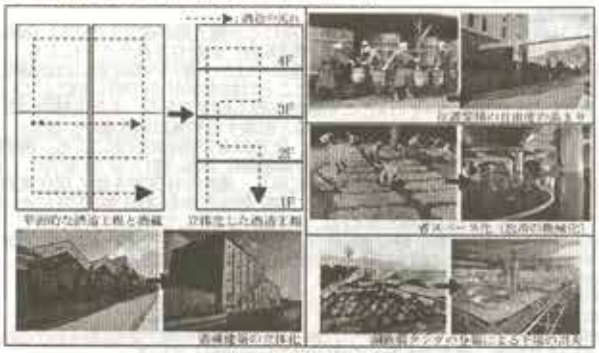

図-8　面積効率の高まり

表-2　酒造会社数の変化

	1965年	2004年
灘地区	45	22(8)
西宮地区	25	14(7)
伏見地区	37	28(10)

（　）は集約・休業（酒造用地をもたない）

4．酒造用地の土地利用変化

こうした余剰空間に加え、清酒の生産量は1973年をピークとして、減少の一途を辿っており、廃転業する酒造会社が多く、特に灘五郷では、阪神大震災によりその傾向が強いため（表-2）、酒造業の斜陽化による酒造跡地は酒造業以外への利用変化として表れている。

（1）酒造空間の観光化

酒造会社では、資料館、記念館、販売、飲食、多目的ホールなど多岐にわたり様々な観光施設を設けている。

酒蔵を転用した資料館（灘）　酒蔵を転用したレストラン（伏見）
写真-4　酒造空間の観光化

その建設手法は損壊した伝統的酒蔵を復元したもの、全国から古材を収集し建設したもの、伝統的木造酒蔵の和風意匠をまね新建材で建設したもの、既存建物を改装し販売や飲食を組み込むものが見られる。灘地区では、各社資料館を併設する場合が多く、昔は使っていた煙突や井戸を修景し設置するなど趣向を凝らしたものも見られる。西宮地区では、周辺の商業地に混ざって飲食・販売施設を建設する場合が多く見られる。例えば図-7に示すA社でも資料館を建設し販売施設を組み込んでいる。伏見地区では、酒造空間が移転した旧市街地の一部が他の古い建築物が残る町並みと一帯となって、木造酒蔵を資料館や飲食施設に転用している。例えば図-7に示すB社でもその多くが観光施設に転用されている。しかし、酒造施設の移転によりそうした観光地区で酒造を行わないという現状を生んでいる。

（2）酒造業以外への利用変化

未利用になった酒造用地は、不動産として賃貸[21]、もしくは売却され酒造業以外への利用変化が進んでいる。図-9は、1965年（伏見地区は1967年）の酒造用地の現在の状況を表したものである。

①灘地区：利用変化が起きたのは91ヶ所であるが、25ヶ所が集合住宅になっている他、15ヶ所が倉庫、12ヶ所が事務所ビル、7ヶ所が大型店舗となって多いのが特徴である。その他駐車場、酒類小売業、公園、小規模店舗、戸建住宅、工場、病院、ホテル、ゴルフ練習場がある。一方で、輸送手段である高速道路が酒造空間のすぐ北に平行に敷かれたために、北の市街地と分断され商業施設が少ない。
②西宮地区：34ヶ所で利用変化が起きており、13ヶ所が大型店舗で最も多く、8ヶ所が集合住宅となっている。その他駐車場、酒類小売業、公園、小規模店舗、事務所ビル、倉庫、工場がある。灘とは対照的に元々市街地が高速道路の南にあり、商業施設、住宅地が一体的に形成されている。
③伏見地区：移転跡地が多く生じたため70ヶ所で利用変化が起きている。そのうち27ヶ所が集合住宅であり、13ヶ所が駐車場、5ヶ所が大型店舗である。加えて跡地を分

図-9　酒造用地の利用変化図

割した戸建住宅が9ヶ所もあるのは特徴的である。その他テナントビル、公民館、幼稚園、小規模店舗、公園がある。

このように地区ごとに大きな違いはなく、酒蔵跡地は汚染等がなく何にでも利用転換しやすいため、多種多様なものが建設されている。これは、昭和43年に施行された都市計画法の用途地域指定により、図-2,3 のように酒造空間ほぼ全てが準工業地域に指定されていることに起因している。この地域は「主として環境の悪化をもたらすおそれのない工業の利便を増進するため定める地域」と定められ、事実上ほぼあらゆる建築物を建設できる。また、特別工業地区の指定を受けていない。まちづくり協定[(2)]は灘地区と伏見地区で定められており、木造酒蔵に準じた意匠を地区の建築に対して推奨し、景観形成を試みている。

5．まとめ

（1）酒造空間の変容

以上、述べてきたことをまとめると、

①灘五郷では、輸送手段および交通施設の変化に対応するため、区画整理が行われ、そして海岸線が埋め立てられた。つまり、鉄道や道路が酒造地帯と平行且つ近くに敷かれたことにより、酒造空間の立地する地区の基盤整備が行われ、酒造空間は場所を変えることなく更新された。

②対照的に伏見では、酒造施設の立地を変化させている。運河沿いにあったものが徐々に水辺とは離れて立地し始め、ついには国道やLCに距離的に近い高瀬川以西に移転させ、全く新しい酒造空間を形成している。酒造空間が出ていった旧市街地では酒蔵と密接な関係にあった水辺空間が修景されていく。つまり伏見では、灘五郷とは反対に水辺空間をそれ程変化させることなく、酒造空間を移転させた。

③建築単体の変化としては、灘五郷・伏見とも共通して酒蔵はRC造で立体化し、設備機器を包むための建築へと変容している。これは、1960年頃の酒造技術の変革によるものであり、これにより面積効率が高められた。

④このような面積効率の高まりにより余剰空間が生じ、酒造空間を観光化させている。様々な施設を付随させており、資料館を併設する灘、他の商業空間と一体化する西宮、観光地域化する伏見と地区ごとに違いも見られる。それに加え、酒造産業の斜陽化によって生じた酒蔵跡地では、酒造業以外への利用変化がなされている。集合住宅や大型店舗、駐車場などが多い他、多種多様なものに建て替えられており、各地区とも大きな違いは見られない。

⑤このように多様なものが建設されているのは、酒造地帯のほとんどが規制の緩い準工業地域にあり、現在地域ごとに定めるまちづくり協定は景観のみを規制するものであるため、土地利用のコントロールまではなされていない。

（2）酒造空間と地域の関係

灘五郷および伏見では、地域的に酒造密集地という特色を生かしたまちづくりに取り組んでおり、前述したまちづくり協定もその一環である。灘地区ではその協定に基づき、かつての街道を軸として酒蔵だけでなく、集合住宅や店舗等も素材は違えども木造酒蔵をイメージさせる意匠となっているが、それ以上に隣接する工業地帯の景観が地域の印象を決定づけている。西宮地区では住宅地化が進む周辺地域において、酒造空間の一部が商業・観光施設として利用されているが、酒造会社単位の点的な活動にとどまっている。また、灘地区、西宮地区共に準工業地区であるため、様々な機能の建築が建ちやすく、まちづくりの一貫性を難しくしている。伏見地区では、かつての街路構成や水辺が残る旧市街地において、行政と酒造会社が一体となり、木造酒蔵を活用した面的な整備、観光化が進んでいる。その一方で、酒造空間自体の移転によって、地区内で肝心の酒造りを行う酒蔵が激減するという問題を抱えている。

《謝辞》本研究を進めるにあたり、辰馬本家酒造学芸員の寺岡武彦氏をはじめ各酒造会社の方々には、仕込みのお忙しい時期に快く調査に協力いただいた上、貴重なお話を頂きました。ここに心より感謝の意を表します。

《補注》

(1) 「灘」の名称は1716年に文献に現れるが灘五郷が確立したのは1885年に摂津灘酒造組合（のちの灘五郷酒造組合）が設立されたことによる。

(2) 明治期には愛知県常滑、大阪府池田のほか、瀬戸内海岸部には銘醸地が多く存在し酒造会社が密集していたことは柚木学が 2)で明らかにしている。しかし、2002 年時ではどこも数社が残る程度である。また広域的に見れば数が多い所でも、灘五郷や伏見ほど密集する地域は他にない。12)

(3) 輸送手段の変化時期に関しては、社史および酒造組合史による。清酒生産量の変化に関しては、国税庁統計年報書による。13)

(4) ヒアリング調査は、各酒造組合に属し、集約や休業等を除く現在実際に酒造を行っている酒造会社のうち、2002 年 8 月から 2003 年 12 月にかけて調査協力を得られた灘五郷 15 社、伏見 6 社に対して行った。

(5) 1965 年（灘五郷）、1967 年（伏見）と 2003 年の住宅地図を見比べ、2004 年 12 月に行った現地調査により、酒造用地の利用変化調査を行った。

(6) 灘五郷酒造組合(神戸市東灘区)、伏見酒造組合(京都市伏見区)を指す。

(7) 灘五郷の酒造空間の形成に関しては、柚木学の知見を基にした。

(8) 伏見の酒造空間の形成に関しては、酒造組合史を参考にした。

(9) 宮水とは1837年に発見された西宮市内の特定の地下から汲み上げられている井戸水。現在でも多くの蔵元がこれを使用している。

(10) 立地的要因および素材的要因の言葉の定義は、柚木学による。

(11) 高瀬川は 1614 年角倉了以らによって伏見から京都二条まで開削された運河。これによりそれまで淀から京都に陸運で運ばれていた物資が、伏見港を経由し船で運ばれることになった。13)

(12) 濠川運河は、豊臣秀吉の桃山城の外濠跡を生かして造られた運河。13)

(13) 灘五郷 36 社(休業集約 15 社)、伏見 28 社(休業集約 10 社)のうち、社史を刊行し、これまでの建築物の変遷、地域的な記述のあるものは灘五郷 1 社、伏見 1 社しかない。この 2 社を地域を代表する事例として用いた。

(14) 社史 8),9)によれば、当初陸道輸送のほうが海運輸送より運賃が高かったが、徐々に鉄道が発展することにより安価に輸送できるようになった。

(15) 伏見が海運で全国へ輸送する場合、伏見港、大阪港で積み替えしなければならないのに対し、灘五郷では、西宮港から酒だけを積み込む専用船間屋が成立し、積み替えなしで出荷することができた。

(16) 立地の変化図は参考文献 5,6)をもとに作成。

(17) 酒造業は、立地後移転することはほとんどないため、立地場所を創業年で分類することで、年代ごとの特徴ある立地場所を表している。伏見酒造会社の創業年は伏見酒造組合史による。

(18) 酒蔵の変容ついては、酒造会社 15 社へのヒアリング調査による。

(19) 平面配置の変化図は参考文献 5,6)をもとに作成。

(20) 1956 年に連続蒸米放冷機に始まり、1963 年自動製麹機、1966 年自動圧搾機、連続蒸米機が考案された。11)

(21) ヒアリング調査より、多くの蔵元が不動産経営を行っていることが明らかになった。今回、その詳細に関しては明らかにしていない。

(22) 灘地区では、「新住家郷地区まちづくり協定」「大石浦町まちづくり協定」「魚崎郷地区景観形成市民協定」、伏見では「伏見南浜界わい景観整備地区」の指定がある。

《参考文献》

1) 柚木学（1987）「酒造りの歴史」 雄山閣出版
2) 柚木学共著（1983）「灘の酒造博物館」 P47~P57 講談社
3) 神戸市教育委員会編（多羅尾光徳共著）（1981）「酒のふるさと・灘の酒蔵」神戸市
4) 黒田龍二（1999）「灘の酒蔵地区」レポート、（日本建築学会編「阪神・淡路大震災調査報告・建築編 10」 P389~P395）
5) 西川幸治他（1985）「歴史的市街地の変容と現状～伏見における事例的研究、その１～その５」 日本建築学会大会学術講演集
6) 図-2,3 は、国土地理院発行「1:25,000 地形図」により作成。地域情報は、「新修神戸市史（2000）神戸市発行」、「西宮市史（1967）西宮市役所編発行」、「京都市史（1947）京都市役所編発行」による。
7) 神戸市教育委員会編（2001）「沢の鶴大石蔵発掘調査資料」P105
8) 月桂冠三五〇年の歩み（1987）P115 月桂冠株式会社
9) 西宮酒造㈱（1989）「西宮酒造 100 年史」 P171,172
10) 月桂冠三百六十年史（1999） P87~90 月桂冠株式会社
11) 原昌道（1998）「改訂灘の酒用語集」巻末の写真 灘酒研究会
12) ㈱ 醸界タイムス社編・発行「全国酒類製造名鑑」(2002)
13) 伏見酒造組合編・発行（2001）「伏見酒造組合 125 年史」 P10~16